

ラブ♡アクセシデント

目次

ラブ♡アクセシブメント

5

番外編 お願いごとは平身低頭で

269

ラブ♡アクシデント

夢の中で声がする。

「瑠衣……」

肌を滑る指が気持ちいいところに触れる度に、私はビクビクと体を震わせ感じてしまう。

なんだろう……この夢すごくリアル。だって、少し汗ばんだ肌と肌が密着する感触までばっちり伝わってくるんだもの。

あまりの気持ちよさに、私の口から思っていることがぼろりと零れてしまう。

「……もつと、もつとして……」

「いよ」

その人は私のおねだりをおっさり聞き入れてくれる。

肌の温もりが恋しくて、自分から相手の首に腕を回し引き寄せた。そのまま唇を合わせて舌を絡める。

「ふう……ん」

キスに応えるように侵入してきた熱い舌が、私の舌を吸い口腔を荒々しく舐め回していく。

「……気持ちいい？」

ほんの少し唇を離して囁かれ、私は素直に頷いた。

チュツチュツと啄むみたいなキスを繰り返される一方で、相手の手が私の股間に触れる。

その手に敏感な場所をそつと撫でられた瞬間、ビクンと腰が跳ねた。

「あっ……」

相手の指が何度も私の秘裂を往復する。その度に敏感な蕾を指が掠めていき、私の呼吸が速くなった。同時にお臍から股間にかけてキスを落とされ、たまらない気持ちになる。

「早く、早く来て……」

待ちきれずに懇願すると、熱を帯びた硬い屹立がぐつと私の中に押し入ってくる。

「ああっ……」

「……ん、はあ……」

目の前の人から色つばいたため息が漏れたと思ったら、唇にそつとキスされる。

「んっ……んう……」

なまめかしい水音を立ててキスを交わしている最中に、私の奥深くまで楔が打ち込まれた。

「んっ、あっ……き、きもち、いいっ……」

ゾクゾクとした快感に、我を忘れて喘ぎ声を上げる。

夢だというのに、なんと気持ちのいいこと。

巧みな舌遣いと、私の体を撫でる優しく丁寧な手つき。

未だかつて、こんな極上の扱われたことない。

そう思うくらい、この人とのセックスは私を高みに連れて行ってくれる。

パン、パンと私を穿つ度に聞こえる音の間隔が、徐々に狭まっていく。

大きくなっていく快感に悶えながら、私は相手の背中に回した手に力を込めた。

「はっ……あっ、イクッ、イチチャウ……!!」

私がぎゅっと目を瞑ると、追い立てるように一気に速度が増した。

「んっ……溜衣……っ」

目の前から発せられる苦しそうな声と共に、私の頭が真っ白になる。

「あっ、あっ……っ」

ほぼ同時に絶頂を迎え、二人してくたつと脱力した。

ぼんやりしたまま息を乱す私に、その人は優しいキスをくれる。幸せな気持ちに満たされ、私の

意識はそこでぶつくりと途切れた。

——あれ？　そういえば私、最後に誰の名を叫んだのだろうか？

あ、頭いつた……

ごわんごわんと頭の中で盛大に響く雑音で目が覚めた。

「……あれ？」

痛む頭を押さえて起き上がると、眼前にはいつもと違う景色が広がっている。

……ここどこ？

糊の利いた真っ白なリネンと、スプリングの利いた立派なベッド。

どうにも嫌な予感がして、私は恐る恐る自分の体を見下ろし愕然とした。

——すっ裸なんですけど!!

反射的に隣を見るが、そこには誰もいない。

これはきつと夢に違いないと、往生際悪く自分の体をペタペタ触る。しかし、もちろんちゃんと

感覚があった。

これは夢じゃない、現実だ!

状況を理解した途端、私の頭の中に広がる無数のクエスチョンマーク。

ちよ、ちよと待て。昨夜の私、一体何してたっけ……？

混乱する頭を必死に動かして、昨日の記憶を辿る。

仕事帰りに会社の仲間数人と飲みに行ったのは覚えてる。確か居酒屋からカラオケに移動して久

しぶりにハメを外して騒いだよう……。だが問題はその後だ。ぶつくりと途切れたように、そこ

から先の記憶がまったくない。

私何やってやったんだろう……っというか、誰と？

ひよっとして飲みに行ったその中の誰かとここに来たってこと……？

そう思い至った私は、文字通りベッドの上で頭を抱える。

自分の酒癖の悪さは多少なりとも自覚していた。

酔うごとにテンションが上がり、人に絡みまくって泣く。挙げ句の果てには、ぱったりと寝落ちするのだ。

大体いつもこんな感じで周りに迷惑をかけていたので、ここ数年は外で飲むときには十分気を付けていたのに。それが、二十八歳にもなってなんでこんなことに……
ちらりと見ると……ゴミ箱には溢れんばかりのティッシュの山。

これ確実にやったんだろうな……なんとなく下腹部にそれっぽい感覚が残ってるし。乾いた笑みを浮かべて現実逃避をしつつ、ガバリとベッドに突っ伏した。

「もう、もう、私のバカバカ——!!」

しばらくベッドの上をゴロゴロと転がる。

そこで、ふと枕元に一枚のメモが置かれているのを見つけた。

自分でもびっくりするくらい勢いでそのメモに飛びつき、内容を確認する。

【連絡して】

「はあ!? これだけ!？」

メモを持つ手がフルフルと震える。

「せ、せめて名前とか書いとけよおおお!!」

どっぶり自己嫌悪に浸かった後、もそもそとベッドを出て着替えを始めた。

その最中、何気なく鏡に映る自分の姿を見た私は、ある異変に気付く。

「……ん?」

首筋にぼつんと赤い痣。

「キスマーク……?」

慌てて体中をチェックすると、胸や太腿の内側にぼつぼつと同じような痣を見つけた。

もう、これは確定だよ……!

自分がやらかしてしまった事実から逃げるみたいに、着替えるなりホテルを飛び出した。

一目散に自分のマンションに帰り、バスルームへ直行する。

頭からシャワーを浴びた後、冷静になって昨夜のことを思い出してみた。

昨夜の飲み会メンバーは、私を含めた同じ部署の四人と途中で誘った他部署の同期一人の、全部で五人。その中で、可能性があるのは三人だ。

まず、うちの部署の課長で、直属の上司である内藤晶也、三十二歳。穏やかで男前な課長は、気さくな人柄で皆に親しまれている。上司だけど、いい兄貴って感じ。

二人目は他部署の同期で、結城陽人、二十八歳。女子顔負けの綺麗な外見に反して、性格は結構さっぱりしていて男らしい。一言でいうならクールな二枚目だ。

最後はうちの部署の後輩である、間宮渉、二十五歳。彼は凄く背が高く、ガタイも立派だが、意外にも生真面目で気遣いのできるいい後輩。

あの日は——最初に課長が飲みに行くぞって言い出して、それに私と同期で友人の若菜と間宮君が乗った。会社を出るときに、偶然出くわした結城を誘って……

あ、そうだ。若菜に聞けばいいんじゃない!

若菜だったら気が知れてるし、酔った私に耐性もあるから聞きやすい。
早速スマホを手に取り、若菜に電話をかけた。

『はいはい』

電話が繋がるなり、若菜の明るい声が聞こえてきて、ちよつとだけ気分が落ち着いた。

「ごめん、若菜。今、大丈夫？」

『うん。つーかさー、瑠衣……あんた、昨日酷かったわ……』
いきなりガン、と頭にタライが落ちてきたような衝撃が走る。

——な、何？ 私、あれ以外に何かやらかしたりしたの!?

「あのう……若菜さん。昨日私、何やらかしました……？」

衝撃が大き過ぎて、若菜に尋ねる声も自然と小さくなる。

『やっぱり覚えてないんだ。やめろって言ったのに、ビール飲んだ後日本酒にまで手出すから。あんなのチャンポンは危険なのよ』

少し呆れたため息まじりの声。それも仕方ない。若菜には今までも、酒を飲み過ぎて醜態を晒す私を目撃されていた。

そうか。この事態の原因はチャンポンか……

「若菜様、迷惑をかけて本当に申し訳ございません……!」

若菜には見えるはずもないけれど、私はその場で深く深く頭を下げた。

『私は慣れてるからいいけどさ、あれは初めて見る人間は引くよ』

私の体からサーッと血の気が引いていく。

「そんなにつ？ やだ、どうしよう！ほんとに私何やったの!？」

ついついスマホを持つ手に力が入る。

『まずは……内藤課長になんで結婚しないんだってしつこく絡んでたわね』

直属の上司に、なんてことを……!

「う、うん……内藤課長、格好いいのに全然女の噂無いからさ……」

『次に、結城に向かって、お前男のくせに私より綺麗な顔してんな！ って文句言ってたわね』

結城にもか!

「ああ。あいつ、大学時代に罰ゲームで女装して街歩いたら、芸能プロダクションからスカウトされたらしいよ……」

話しながらソファアの背に凭れ、そのまま天を仰いだ。

『最後は、間宮君に二次会のカラオケで何度も同じ曲歌わせた。挙げ句、自分も歌いながら号泣して間宮君のシャツで顔拭いてたわよ。間宮君のシャツ、あんたのマスカラで真っ黒になつてた』

「ああ……間宮君……歌上手いんだよね……美声でね……」

後輩にも迷惑かけたなんて、私、私……

想像以上の醜態ぶりに、無言でソファアをバシバシ叩く。

『……で、散々騒いだ挙げ句、潰れて寝てたわよ』

「本っ当に、申し訳ございませんっ……!!」

私は、電話の向こうの若菜に向かって土下座をした。

ああああー恥ずかしい。ここに穴があったら、今すぐ埋まってしまいたいくらいだ。

『で？ あんた、ちゃんと家に帰れたの？』

若菜の言葉に、あれ、と思い頭を上げた。

「えっ、若菜最後までいたんじゃないの？」

『うん。彼が迎えに来てくれてさ。丁度瑠衣が寝始めた頃かな。申し訳無いとは思ってたんだけど、男性陣がいいって言うから先に帰ったんだ、ゴメンね』

「そ、そっか……いいいいいよ、ていうか謝るのは私の方だし……」

『ねえ……ちゃんと帰ったんだよね？』

若菜が心配そうに問うてきた。しかし、朝起きたらすっ裸でホテルにいたなんて、さすがに若菜にも話せない。

「う、うん。ちゃんと起きてタクシーで帰ったよ」

私はついつい取り繕うように明るい口調で嘘をついた。

『ならいいけど。まあとにかく、昨日のメンツに会ったら、ちゃんとお詫びとお礼した方がいいよ』

「うん……分かった……」

若菜との電話を終了して、がっくりと項垂れた。

——もう混ぜるの禁止!! というか金輪際、酒は飲まない!! 禁酒する!

そう心に誓う。

そうだ、この誓いを紙に書いて、分かりやすく壁に貼っておこう。

実は私、書道の段位を持っている。唯一の趣味ともいえた。

いそいそとクローゼットに仕舞ってあった書道セットを取り出し、リビングのテーブルに道具を広げる。私は床に正座をして息を落ち着け、ゆっくりと墨をすりだした。

いつもは半紙を前にして、硯で墨をすっているだけで自然と気持ちが落ち着いていくのに、今日は無理そう。

結局、昨夜の相手は分からなかった。かといって、他のメンバーに聞く勇氣もない。まさかとは思うけど、宴会の後に知り合った行きずりの相手とかだったたりしないよね。そんなの、考えるだけでも恐ろしいよ。

かといってあの三人のうちの誰かだとしても、気まずいことこの上ない。だって、こっちは何も覚えてないんだし。

「なんてこった……」

来週、本気で会社に行きたくない。

我ながら情けなくて、墨をすっている小さな硯に顔を突っ込みたくなった。

【禁酒】

「我ながら上手く書ける……」

真っ白な半紙に黒々とした墨で書かれた毛筆の文字。

戒めとして壁に貼ったそれを眺めた後、私は覚悟を決めて家を出た。

悶々とした週末を過ごし、ついに月曜がやってきてしまった。

会社に向かう足取りが、どうしても重くなってしまう。

ああ……会社行きたくない。あの三人にどんな顔して会えばいいんだか。

それに、もし相手から言ってこられたらどうすれば……

いや、もういつそのことこっちから聞いちやった方がスッキリする？

「あのう、この前の飲み会の後、私とやりました？」

なんて聞けるか——!!

思わず歩みを止めて眉間を押さえた。

そんな、ストリートにやったかなんて聞けるわけがない。それこそ恥の上塗りだ。

重いため息をつきながら会社に到着し、ロッカールームで制服に着替える。最後に緩くウェーブ

がかかった背中までの髪をシュシユできっちり一本にまとめて鏡を覗いた。

そこに映るのは、グレーのベストと濃紺のタイトスカートを身に付けた、ナチュラルメイクの私。個々のパーツがはつきりしているので、しつかりメイクをすると、少々けばくなくなってしまう顔だと自分では思っている。

簡単に身だしなみのチェックを済ませ、ロッカールームを出た。

私が勤務するのは中堅の総合商社だ。その総務部総務課に勤務している。

総務というだけあって、仕事の内容は多岐にわたる。例えば、社内イベントの運営や、福利厚生
の施策、庶務業務などなど。

入社して六年目の私は、今では内藤課長に次ぐポジションに立たされていた。

同期入社した女性社員が、結婚して寿退社したり、社内恋愛を成就させ旦那さんの海外赴任について行ったりする中、私は順調に社内でのポジションを上げている。

——おっかしいな。私も三年前までは寿退社する気満々だったのに……

そう。三年前、私にもお付き合いしている彼氏がいた。

大学のときに合コンで知り合った、外資系企業に勤める彼。私はその人と結婚するつもりでいたのに、彼の海外転勤が決まった途端あっさり振られてしまったのだ。

それ以来、彼氏もいなければ色っぽいこともなく、主に会社と自宅を往復する毎日。

最近の楽しみと言えば、時代劇を見ることと書道することくらいだった。

なのに、久しぶりの色っぽいことがまさかこんなだなんて……

おまけに覚えてないとかありえない。

いっそのままで、本当になかったことにできないだろうか？

なんて、ちょっと現実逃避をしながら、重い足取りで部署に向かう。

けれど、そういうときに限って、会いたくない人間に会ってしまうものらしい。こちらに向かつて歩いてくるのは、謝らなければいけない相手第一号、同期の結城陽人だ。

長身で少し茶色がかった髪ふたえまつたの結城は、今日も女子顔負けの綺麗な顔をしている。彼も私に気付いたようで、二重瞼ふたえまつたの綺麗な目を微かに細めた。

結城とは入社当時からなんとなく気が合って、たまに飲みに行ったりする程度には仲がいい。いつもだったら全然緊張なんてしないのに、今日に限っては近くに行くほど緊張した。

だけど、早く謝らなきゃいけないという一心で、思い切って声をかける。

「おっ、おはよう！ 結城」

結城は私に近づくと、サラサラの前髪が少しかかるキレイな目で見下ろす。

その表情に、ちよつとだけおの慄いた。

——もしかして、お、怒ってる……？

「あの、結城。その……金曜の夜は本当に迷惑かけてゴメンナサイ！」

謝りながら私は自分の腿ももに頭がくつつくくらしいの勢いで、深く頭を下げた。

「……お前、何したか覚えてんの？」

結城は無表情のまま、じつと私を見ている。

——これって、もしかして夜のことについて言ってる？

ギクツとして一瞬言葉に詰まってしまった。だが、結城は黙って私の言葉を待っている。

「それが……その、まったく覚えてなくて。昨日若菜から、皆に絡からんでたって聞いたから……それで」
言いづらくて、ぼそぼそ小声で話す私に、結城は大きなため息をついた。

「まあ、お前が酔ってクダ巻いてカラオケで熱唱するの何回か見てるけど……人の顔見りや美人を連呼しやがって！ ムカついたから、寝始めたときはマジで置き去りにしてやろうかと思ったわ」
「ひどっ！」

「いつもからかわれてる、こっちの身にもなれ」

「……綺麗なのは本当のことなので……わっ！」

正直に言った瞬間、結城が私のおでこに人差し指を当て、ぐりぐりし始めた。

「やだー！ やめてー!!」

「嬉しくねえ！」

慄きながらも、ついつい言い返しちゃった私。それに対して、いつも通りの反応が返ってきて何故かほつとしてしまう。

「と、とにかく……迷惑かけて本当にごめんさい！」

私はもう一度深く頭を下げる。すると頭の上にボン、と優しく結城の手がのった。

おずおずと顔を上げると、私を見る結城の表情が少し和やらいでいる。

「……いいよ。気にしてねーから。他の二人にも礼言れいごつとけよ」

「う、うん、分かった。ありがとう……」

そして結城は、片手を上げてスタスタと歩いて行ってしまった。
なんら変わることはない結城の態度に、私は彼と気まづくならなくてよかったと心の底からほっとした。

「だけど……あれ？」

いつも通りだな。じゃあ、金曜の夜の相手は結城じゃない……？

結城に会うまでは凄く緊張していたのに、彼の反応があまりに普通で、ちよつと気が抜けた。さっきまでの私の気負いはなんだったんだ。

拍子抜けした私はポリポリとこめかみを搔いてから、自分の部署に向かった。

「お、おはようございます……」

「おはよう」

部署に入るなり私の挨拶に応えてくれたのは、謝らなければいけない相手第二号、内藤課長。

三十二歳にして独身の課長は、優しく爽やかなイケメンなのに、どういうわけか、浮いた噂が一つも無い。

実はもう結婚しているのではないかとか、いろいろ言われているが、本人が私生活を何も語らないので本当のところは謎なままだ。

課長は机の脇に立ちコーヒーを飲んでいた。その姿は、スタイルがいいこともあって紳士服のモデルのように絵になっている。

もしもこの人が、あの夜の相手だったら……

ああ、どうしよう……ものすごく気まずいよ！ できることなら、今後はなるべく顔を合わせずに過ごしたいくらい！

でもそんなことできないもんな……と項垂れる。

私は、内心ビクビクしながら課長に近づいた。そして息を吸い込み、勢いよく頭を下げる。

「金曜日はご迷惑をおかけしたようで、大変申し訳ありませんでしたっ」

「ん？ なんで？ 面白かったけど」

しかし、かけられた言葉はまったく予想していなかったもので。

「お、面白い……ですか？」

視線を上げれば、目の前の課長がフツ、と優しく微笑む。

「水無^{みずなし}つて、酔^よっぱらうとあんな感じなんだな」

持っていた書類で口元を隠し、課長が私の顔を覗^{のぞ}き込んだ。

その、いつになく親密な態度に変な汗が出る。

——えっ……ま、まさか、本当に課長があ夜の相手……？

私の体から、サーツと音を立てて血の気が引いた。

あんな感じってどんな感じですか？ などと尋ねることもできず青くなる。

「俺の老後まで心配してくれるなんて、お前意外と優しいんだなあー」

腕を組んだ課長が口元に笑みを湛^たえ、私を横目でチラツと見る。

あ、そっち……

ホツとしかけて、いやいや！ と内心で激しく首を振った。

それはそれで上司に対して言うことじゃないよと、改めて自己嫌悪に陥る。
これはもう、ひたすら謝るしかない。

「あの、失礼なことを言っただけで、本当に申し訳ありませんでした……!!」

私は課長の顔を窺いつつ、ダメ押しとばかりにもう一度頭を下げる。

直属の上司に嫌われたら、私もうこの部署でやっていけない。

「嘘だよ。気にしないから……」

微笑んでそう言ってくれる内藤課長。でも、その微笑みが意味ありげに見えるのは気のせいだろうか。

私は思わず、無言で課長を見つめてしまう。キリリとした眉はそのままに、目尻を下げて笑う課長はいつも通り男前だけど、なんだろうこの微妙な感じ……

「課長。もしかして私、他にも何か失礼なことを……?」

「うん？ いや」

……絶対私、他にも何かやらかしてる……それって、もしかして夜の!?

そう思ったら、背中にひんやりと冷たいものが走った。

「まあ、楽しかったよ」

冷や汗を流している私の肩を、笑顔の課長がポン、と叩く。

何が!? 何が楽しかったの!?

核心に触れない会話がもどかしくて、地団駄を踏みたい衝動に駆られた。

「それより水無。記念冊子の進捗状況はどうだ?」

急に仕事モードに切り替わった課長に、なんとか私も頭を切り替える。

「あ、はい。今のところ問題なく進んでいます。使用する写真と全体のレイアウトは、先日の部長チェックでOKをもらいましたので、今後は在籍社員の手紙を集めていく予定です。とりあえず、各部署から一人ずつ、人選もほぼ決まっています」

「順調だな」

課長がニコッと爽やかに微笑んだ。

現在、通常業務の他に私が任されているのは、今年で創立五十周年を迎える我が社の記念冊子の作成だ。通常の社内報は薄いパンフレットのようなものだけど、五十年という節目の年だから少し立派な記念誌を作れと上層部からお達しがあった。

編集作業は総務部で担当することになり、私が中心となってレイアウトや取材の手配、原稿作成から印刷会社との打ち合わせ等、忙しく動き回っている。

一年ほど前から準備を進めているのだが、何せ五十年分の歴史だ。社史とするには膨大な時間と手間とお金がかかる。さすがにそこまで人材も予算もかけられないということになり、今回は『五十年のお祝い』という部分に特化した記念誌を作ることになった。

「原稿をお願いした社員の写真は、都合を聞いてこちらから撮りに行ってきます」

「分かった。大変だろうけど、よろしく頼むな。おーい、湯浅！」

私との話を終えた課長が、席にいた若菜を呼んだ。

私は自分の席に向かいながら、眉を寄せて考えを巡らす。

で……結局、あの夜の相手は課長なの？ ……違うの？

さっきの課長の態度を見る限りでは……まだはっきりと確信が持てない。

いつも通り、かと思えば意味ありげな微笑みが気にかかるっていうか……どっちなんだろう？

うーん、と考え込んでいたら、謝るべき相手、第三号が給湯室に入っていくのが見えた。

私は慌てて立ち上がりその後を追う。

「まっ、間宮君！」

「あ、水無さん。先日はお疲れ様でした」

私が続ける言葉に迷っているうちに、そう言っただけで微笑む。

彼は私と同じ総務部の三年後輩にあたる。勤務態度は至って真面目で仕事ぶりも丁寧。そしてカ

ラオケで威力を発揮する美声の持ち主だ。

腹を決めて近くまで行くと、相変わらずデカイ。身長百六十五センチの私が見上げてしまうほど

背が高い間宮君はたぶん百八十五センチはあると思う。

「まっ、間宮君。金曜の夜は迷惑をかけて本当にすみませんでしたっ！」

本日三度目の謝罪。

間宮君は私の行動に驚いたのか、持っていたコーヒーを置いて顔の前で掌をぶんぶん横に振った。

「や、やめてくださいよ！ そんな迷惑なんて思ってませんから！」

「……でも若菜に聞いたら、私カラオケで間宮君に凄く絡んだって……」

「歌うくらいどうってことないですよ。むしろ俺の歌声好きだって言ってもらえて嬉しかったです」
にこやかに言うが、それでは私の気が収まらない。

「でもでも、間宮君のシャツ汚したって。クリーニング代出すから、遠慮なく言ってくださいー！」

「いやいや、本当に大丈夫ですって！ 洗濯したら綺麗に落ちましたし、心配いりません」

そう言って、間宮君がにかっと思った。

「ほ、ほんとに？」

「はい。だから気にしないでください」

間宮君は物凄い美形とかではないんだけど、醸し出す柔らかい雰囲気の魅力だったりする。彼が怒ったところなど見たことがないし、いつもすごく穏やかだ。だから、つい私も彼の優しさに甘えてしまうのだけだ。

「うっ、ごめんね、ありがとう……」

「水無さんは、酒飲むといつもああなんですか？」

「うっ……」

間宮君の何気ない一言が、私の心にグサリと突き刺さる。

項垂れた私に気付いたのか、間宮君が「あっ、責めてるわけじゃなくてですね……!!」とすかさずフォローしてくれた。

「だ、大丈夫だよ……。いつもは飲む量セーブしてるんだけど、金曜はなんかハメ外しちゃって」
「水無さん！ 本当に気を付けてくださいよ。今回は、一緒に居たのが僕らだったから良かったものの……。もし、変な男に連れて行かれたりしたらどうするんです？」

大きな体をグツと私に近づけて、間宮君はまるでお父さんのように私を窘める。
彼の勢いに、私はペコペコ頭を下げ、すみませんを連呼した。

まったくもってその通りだ。返す言葉もございません。

ん……!? 連れて行かれる？ もしかして間宮君、あの夜のこと何か知っている!?

「え、あの、間宮君、ひよっとして夜……」

「夜？ なんですか？」

——あれ？

「うん、ごめん。なんでもない」

私はその場を笑って誤魔化した。

「そうですか？ じゃ、本当にこれからは気を付けてくださいね？ 何かあったら心配ですから！」

間宮君にしては珍しく真剣な顔で注意されて、私はその勢いに押されるように何度もウンウンと頷いた。

「はい！ はい、気を付けます！ あ、ありがとう間宮君」

私の返事に安心したのか、にこっと笑顔を見せて彼は給湯室を出て行った。

あれってどういう意味だったんだろう。ただ心配してくれているだけ？

うーん、分からない……

可能性のある三人に会ってみても、どの人があの夜の相手なのかさっぱりだ。

全員がいつも通りのような、何かあるような……。本当に知らないのか、はたまた隠しているのか……

「ああもう……」

一体相手は誰なのよ……!!

給湯室でしゃがみこみ頭を抱える……

初日、収穫なし、である。

結局、相手が誰だか分からないまま、業務を終えて家に帰ってきた。

私が住んでいるのは鉄筋四階建てのワンルームマンションの三階。

広めのリビングと、対面キッチンが気に入ってここに住んでもう五年になる。

部屋着に着替えて髪を結び、定位置であるソファーにどさっと腰を下ろした。

「ふぁー、疲れた……ビール飲みたい……」

いつもならビールを飲んでつまみを食べ、録画しておいたテレビ番組を観て過ごすのが私の日課なのだが、禁酒を誓った今、それができない。

壁に貼られた【禁酒】の文字を見ながら、ため息をつく。

「せめてつまみだけでも食べるか……」

買い置き柿の種をポリポリ食べつつ、もう一度、今日謝ったあの三人の言動を思い出してみた。まずは結城。会った瞬間の表情や、会話の感じは普段通りだった気がする。私が言うことにムツとする態度も同じだったと思うけど……いつもよりはちょっと怒ってた？

内藤課長は、朝から爽やかだった。だけど……今朝はやけに私の顔を見て笑っていたような気がするんだけど……どうか。

間宮君もいつも通りに見えたんだけどなあ……でもなんですか、すごく心配された……かな？

そう考えると、結城はいつもより少し怒ってて、課長は笑顔が多くて、間宮君は心配してくれたってこと。いつも通りながら、三人三様の反応だ。

三人ともあの夜のことには触れてこなかったけど、これはどういう意味？

まさか、あの三人以外の人ってことはないよね……

「ああ〜、分かんない〜!!」

頭を両手でワシャワシャ掻き乱し、ソファの背もたれに倒れ込んだ。

ここでハッと相手に繋がるものを思い出す。

私はソファから体を起こして、テーブルに載せたままだったメモを手を取った。

【連絡して】

じっとメモを見るけど、文字に見覚えなんてない。

だけど連絡して、ってことは私が連絡できる相手ってことだね。となるとあの三人のうちの誰

かが相手なのは間違いないと思うんだけど。

もしかして無かったことにしてくれるってこと？ 酔ったうえでの行為だし、お互い大人だし……

つい自分の都合のいい方向に解釈したくなるが、手に持っているメモがそれを許してくれない。

——いや！ だったらこんなメモを、わざわざ置いて行ったりしないはずだ。

もしかしたら、相手は私からの連絡をずっと待っているのかもしれない。だとしたら今、私のことをどう思っているんだろう。しちゃったくせに連絡一つしてこない酷い女、とか思われてたりするのかな……

けど思い出せないものは思い出せないのだ。

見事に八方塞がり。

「うわああああ……もうだめだ……これ以上考えたら頭爆発する……」

今日はもう考えるのやめよ……気分転換、気分転換しなくちゃ。

ああ……こういうときこそ、パーッとお酒飲んで嫌なこと忘れたいの……

でもその気分転換のせいで、今こういう状況に陥ってるんだよね、と気付いて更に落ち込んだ。

「つて、また落ち込んでる場合じゃない……じつとしてると気が滅入るわ」

気合でテーブルの上に載っていたりモコンを手に取り、ハードディスクに録画しておいた番組を再生する。

「やっぱこれだな……」

画面に映し出されたのは、江戸時代の街並みに、和服に身を包んだ登場人物達。そう、時代劇だ。

何気なく観ていたらハマってしまつて、それ以来暇さえあれば観ている。勧善懲悪で、最後は必ず悪を倒してくれるっていうのがいいんだ。

気分が落ち込んだときに観ると実にスカツとする。まさに今の気分ぴったりだ。特に、お決まりの展開で悪人をバツバツ斬つていく殺陣シーンが大好きで……

「うーんすごい迫力！ たまらない〜！」
テレビ画面に映し出される將軍様に見惚れ、その夜は寝るまでずっと時代劇を観続けたのだった。

そして翌日。昨晩時代劇を観続け気分転換に成功した私は、今はとりあえず相手の出方を窺うしかないと悟つた。

ここは辛抱であると結論付け、会社で黙々と通常業務に勤しむ。

「水無さん、内線三番に電話入ってます」

はーい、と何気なく電話に出た。そこから聞こえた声に、思わず椅子から飛び上がりそうになる。「ゆ、結城っ!?!」

『そんなに驚くか？ まあ、いいや……この前言つてた写真、今なら手空いているから撮れるぞ』

「あ、そ、その件ね。分かった、これから伺います」

さつきまでは辛抱辛抱なんて思っていたくせに、いざ当事者の声を聞いた途端動揺するって、ど

うなの私。

しどろもどろで電話を終え、席を立つて課長のもとへ行く。

「課長。記念冊子用の写真を撮りに、営業企画部に行つてきます」

声をかけると、いつものように爽やかに笑ってくれる課長。

「はいよ。よろしくな。カメラ忘れんなよ」

「はい」

課長は相変わらず通常運転だ。こっちは話しかける度に緊張しているというのに。

ま、いいか……今はそのことを考えてる場合じゃないしね。よし、行くか。

総務のあるフロアを出ると、階段で営業企画部があるひとつ上の階へ移動する。

営業企画部は総務と違って男性社員ばかりだ。似たようなスーツ姿の中から、私は目的の人物を見付けて近づいた。

まだちよつと顔を合わせると緊張する。けど、これは仕事だ、と頭を切り替えた。

小さく息を吐いて、パソコンに向き合つて作業をしている彼に声を掛ける。

「ゆ、結城」

彼はすぐに振り返つた。

「ああ、来たな」

営業企画部で冊子用の原稿を書いてくれることになったのは、結城だった。

結城は来年には主任になるだろうと言われている、営業企画部期待のホープだ。その見た目の麗

しさも相まって、今や社内でも結婚したい独身男性ベスト5に名前が挙がるくらい、女性社員の人気は高い。

ただどこの本人は、周りの視線などどこ吹く風とばかりにマイペース。私を知る限り、浮いた話のひとつもない。

結城を見ていると、あんなにルックスいいんだから彼女作ったりすればいいのになんて、ちょっと思ったりもする。まあ私がどうこう言うことでもないけれど。

「じゃあ、早速だけ写真撮らせて」

私は持参したカメラを取り出し、結城に向けた。

「俺どうすればいいの。仕事してるような感じの方がいい？」

「今のところ二パターン撮らせてもらってる。座ってデスクワークしてる写真と、正面からの写真。どっちを採用するかは、こっちで吟味して決めるつもり」

「了解」

早速私は、結城に白い壁を背に立ってもらい、何枚か写真を撮らせてもらう。そうして次にデスクワーク中をイメージしたものを撮らせてもらった。

「ありがと！ これ、使わなかった方は結城のファンにあげることにするよ」

「やめる……」

もちろん冗談で言ったのだが、結城はものすごくイヤそうな顔をする。

そんなやり取りをしているうちにお昼を知らせるチャイムが鳴った。今日は若菜とランチの約束

をしているんだ。何やら相談があるらしいから早く戻らねば。

「じゃあ結城、ありがとね。引き続き原稿のテキストもよろしく」

軽く手を上げて部署に戻ろうとしたら、結城に呼び止められた。

「水無、よければ昼一緒に行かないか？」

珍しい。結城の方からランチに誘ってくるなんて。

「いいけど……今日は、先に若菜と約束しちゃってるから、三人でもいい？」

結城が「あー」と言って一瞬視線を横に逸らした。

「いや、またの機会にするわ。女二人の会話には、ついていけないからな」

少し残念そうな結城の様子に、私はハツとする。

もしかして、ここでは言いくい話があるんじゃないの……!?

「そ、そう？ 何か話でもあった？」

結城の反応を窺いつつ、思い切って聞いてみた。

「いや。ちょうど昼だったから誘っただけ」

なんだ……たまたまか……

緊張した分、ガクツとする。

「……じゃ、またね」

「おう」

私は貼り付けたような笑顔で結城に手を振り、営業企画部のフロアを後にした。

ああ、疲れた……

席に戻った私は、待っていた若菜と一緒に会社近くのカフェへ行く。

そのカフェは、真つ白い壁に所々レンガ調のタイルを貼ったオシャレな外装をしている。ドアを開けた瞬間、ふんわりと漂^{たな}ってきたパンの香りに食欲をそそられた。

メインはベーカリーショップなのだが、併設されたカフェで食事もできる。ここのパンが好きな私と若菜は、よくランチで利用していた。

道路に面したガラス張りのイートイン席に着き、注文を済ませて、ふうつと一息つく。

「どうしたの？ 冊子大変？」

私の顔を見つつ、向かいから若菜が尋ねてきた。

「え？ ああ、うん。通常の仕事もあるから結構大変だけど、滅多にできない仕事だからね。やりがいがあるよ。何？ 私そんなに疲れているように見えた？」

金曜の夜のこと、結構悩んだり落ち込んだりしてたから、それが顔に出ていたのだろうか。

「ちよつとね。で？ 男三人にはちゃんと謝ったの？」

若菜が笑いながら、軽く聞いてくる。ランチの約束をした時点で、絶対聞かれるだろうとは思っていたけど……

「謝ったよ……そりやあもう謝ったよ……」

言ってガツクリ項^{うな}垂れる。

「ふふふつ。久しぶりにかなり笑わせてもらったわあ。カラオケでノリノリの溜衣を見るの、結構楽しいんだよね」

けらけら笑い、若菜は運ばれてきたランチセットのサラダにフォークを刺した。

「いや、若菜さん……そういうときは止めてくださいよ……」

ひ、他人事^{ひとこと}だと思つて……と若菜を軽く睨^{にら}む。

「だけど、あの後どうやって家に帰ったの？ 誰かが家まで送ってくれた？」

「ぐふつ」

いきなり一番聞かれたくないことを聞かれ、動揺のあまり食べていたサラダを喉^{のど}に詰まらせる。

「やあだ、大丈夫？」

「だ、大丈夫……あの夜のことは私もおぼろげにしか覚えてないんだけど……ど、どうやら誰かが私をタクシーに乗せてくれたみたい、よ……？」

しどろもどろになりつつ、なんとか誤魔化す。

「ふーん……」

「そ、それより、相談って何？」

少し不自然だったかもしれないけど、無理矢理話題を変える。

話を振られた若菜が、「あ、そうそう。じゃー本題に入ります」、と身を乗り出してきた。

「溜衣さー、月末の連休って暇？」

「三連休のこと？ そんなの、聞かなくても分かるでしょう、暇だよ」

私は基本的にインドアな人間である。彼氏と別れてからというものは、休日は余程のことがない限り家から出ない。大体録り溜めたドラマとかをひたすら観ている。

「だと思った。じゃあさ、真ちゃんの実家が持つてる別荘に一緒に行かない？ 泊まりで」

「別荘？ どこ？」

「軽井沢」

「へえ〜！ 真太郎君ち軽井沢に別荘持つてるんだー！」

若菜の彼氏である真ちゃんこと真太郎君は、不動産会社に勤めるサラリーマンだ。そして実家が自社ビルをいくつも持つてるという、お金持ちなのである。

誘ってくれるのは嬉しいのだけど、せっかくの旅行に私が参加していいのだろうか。

「私が行ったら、二人のお邪魔じゃない？」

「ううん、全然。ていうか、その別荘がめっちゃ広いのよ。あんまり広過ぎて二人きりだと持て余しちゃうの。だから、せっかくなら何人か誘ってワイワイやりたいなって思ってる。もらうのは食費だけでいいからさ、一緒に行こうよ。そして極上の信州牛でバーベキューしよー」

「極上の信州牛……！」

テレビで観たことあるぞ。信州牛は、リンゴを食べさせて育てるから、脂にほんのりと甘みがあって、それはそれは極上の旨さだと……

想像しただけで涎が出そう。私は、思わずゴクリと唾を呑み込んだ。

「でさでさ、他にも誰か誘いたいよねえ……あっ!! 結城とかどう？」

若菜が笑顔でパチン、と手を合わせる。

「えっ」

何故ここで結城の名が？

「な、なんで結城？ 他にもいるでしょ……同じ部署の後輩の女の子とか」

若菜に動揺がバレぬよう、必死で平静を装った。

「えー、だって仲良くしてる同期って結城くらいじゃん？ 後輩の女子はさー、泊まりとなるとやっぱり気遣っちゃうし。結城なら、彼女いないから気楽に誘えるじゃん。それとも、内藤課長か間宮君の方がいい？」

と言って若菜が首を傾げる。

もちろん若菜はこの前の夜私の身に起こったことなど知る由もないのだから、仕方ないのかもしれないけど。

つい、私の口からは本音が漏れてしまう。

「なんでこの前の飲み会メンバーなのよ……」

それは私に対する嫌がらせか何かですか？

ここで若菜がぐっと身を乗り出してくる。

「いいと思うんだけどなく結城。それに、Wデートみたいで楽しそうじゃない？ 結城なら見た目格好いいし、なんてったってあんたの本性知ってるんだから、気楽でしょ」

「気楽……かあ」

私は腕を組み、眉根を寄せて考え込んだ。

そう言われてみれば、確かになるほど、と納得できる部分もある。

いやいや、納得しちゃうダメでしょ！もしあの夜の相手が結城だったらどうするのよ！私ぐるぐる考えているうちに「そうと決まれば、早速結城にも声かけてみるね！」と、すっかりその気になっているにっこの若菜さん。

そりゃあ、結城がああ夜の相手とは限らないよ。

むしろ、以前と変わらない態度を見る限り、一番可能性が低いかもしれない。

でもな〜……

私はなんとも言えない気持ちで、ランチセットのBLTサンドを頬張った。

「じゃあ、一応決まりつてことでもいい？もしダメだったら早めに連絡ちょうだいね〜」

「う、うん……わかった……」

若菜にはそう言ったものの、さてどうするか。

お肉と別荘はとつても魅力的で、行きたいのはやまやまんだけどな……

行きたい気持ちと遠慮したい気持ちが半々のまま、この場の話題は別のものに変わっていった。

それから、私はいつも通り会社で仕事に勤しみつつ、三人の男性の動向をそれとなく窺った。だけど一週間経っても二週間経っても、彼らからのアクションは、まったくといっていいほどない。はあく〜とため息をついて、頭を抱える。

——なんで？こんなに気にしているのは私だけなの？ だったらいつそのこと、あれは夢だということにしてしまえば楽になれるのだろうか……

そんなことを考えながら顔を上げると、ちょうどこちらを見ていた内藤課長とぼつちり目が合った。

——あっ……

課長は一瞬、驚いたような顔をしたが、すぐになっこりと微笑んだ。

——まただ……

あれから何故か、よく課長の視線を感じるようになった。ふと視線に気付いてそちらを見ると、課長がこつちを見ていいることがよくちよくある。でも何を言ってくるわけでもなく、ただ意味ありげに笑われるだけなのだ。こつちとしては課長の意図が分からず混乱が増すばかり。

ああもう……胃がキリキリする……

気持ちを落ち着けるためお茶でも飲もうと、席を立ち給湯室に向かう。するとそこで、間宮君にバツタリ遭遇した。

「水無さん。お疲れ様です」

間宮君は私に気付くとすぐに顔をくしゃつとさせ、会釈した。

「あ……間宮君、お疲れ様」

相変わらず穏やかな笑みを浮かべた間宮君が、コーヒーを淹れていた。私は咄嗟に笑顔を張り付け、彼の隣でお茶を淹れる支度をする。

気持ち落ち着かせるつもりが、まさか間宮君と二人きりになるとはなあ……でも毎日顔を合わせているけど、やっぱり彼も、特に何も言っていないだよね。

「あれから飲み過ぎたりしてないですか？」

不意に頭上から声が降ってくる。見上げると、心配そうな間宮君の顔。

あれ以来、何故か会う度に気遣うような言葉をかけてくれるのだ。

「……うん。あれから禁酒してるから大丈夫だよ」

「そうですか、安心しました」

私がそう言うと、ほっとしたような顔をする間宮君。

やっぱり、なんでこんなにいろいろ心配されてるのか分からないな……

——まさか、間宮君があ夜の夜の……？

そう思っただらと横目で間宮君を見ると、こちらを見ていた彼と目が合う。

「ん？ どうかしましたか？」

チラ見したのがまずかったのか、間宮君が不思議そうに私を覗き込んでくる。私は慌てて頭をブンブン左右に振った。

「いやいや……なんでもない！ もうすぐお昼だけど、間宮君はいつもお弁当だよ！ もしかして手作り弁当？」

ついどうでもいい話題でこの場を繋ぐ。しかし間宮君は意外にもこの話題に食いついてきた。

「そうなんです！ 実は好きなんですよ！ 料理。食材があるときは俺自分で弁当作るんす」

にっこにこしながらそう語る間宮君。彼を見ていると、とてもじゃないが色っぽい話が生まれるとは……思えないなあ……

「そうなんだ、ちょっと驚いたわ……」

間宮君と話をしつつ給湯室を出て部署に戻る途中、背後から「水無」と声をかけられた。

振り返ると、そこには結城の姿が。彼は私の顔を見るなり一瞬眉をひそめた。

——ん？ なんで今、変な顔したんだろう？

間宮君に先に行ってもらおうと、結城はすぐにいつもの通りの表情で話しかけてきた。

「……お前、間宮と仲いいの？」

なんだ、藪から棒に。

「仲？ ……それなりにいいと思うけど。あ、彼はねえ、お土産のセンスがピカイチなのよ！ 旅行に行ったときに買ってきてくれるお菓子がそれはもう美味しくてね……」

「あー、そう」

結城が脱力したように無表情になった。

「それより、結城はここで何してるの？ このフロアに用があったの？」

「ああ、今経理に行ってきたところ。これから食堂行くわ」

普通に会話できてる。それに、やっぱり結城も何も言っただけ……

なんて思っていたら会話が途切れたので、ふと目の前の結城を見上げると、私のことをじっと見つめている。その視線にちょっとドキッとした。

「な、なに？」

ちよっとビクビクしながら尋ねると、結城は黙ったままハアとため息をついた。

「まあいいや。早く戻って飯食えよ」

じゃ、と手を上げて先を急ぐ結城の後ろ姿を見ながら、今度は私があゝとため息をつく。

あれから二週間以上経っても相手が分からないってことは、あれはもう夢だったってことにしているんじゃない？ と思えてきた。

大体、相手はなんのアクションも起こさないのに、私だけこんなにやきもきしてるなんてなんだか癪だし……

部署に戻ったところで、タイミングよく昼になった。すると私の席に、若菜が駆け寄ってくる。

「瑠衣〜！ 例の旅行の件だけ考えてくれた？」

「あ、もう来週か……」

気が付けば件の連休が近づいている。行こうかどうか悩んだけど、ここ最近いろいろ考えすぎてストレスも溜まっているし、楽しいことでパーツと発散したいな。

よし！ せっかくだから旅行を楽しもう！

「うん、行く。よろしくお願いします。だけど本当にいいの？」

「もちろん！ でね、私は真ちゃんと朝早めに出発する予定んだけど、瑠衣はどうする？ 一緒に行く？ それとも後から来る？ 一緒に行くなら家の近くまで迎えに行くけど」

「ちなみに、朝早くって何時くらい？」

「六時」

うっ……早い……できることならもう少しゆっくりお邪魔したい……

「ごめん……私、後から行ってもいいかな。新幹線なら一時間ちよいで行けるよね。昼前には到着するようにするから」

「分かった。じゃあ、当日の詳細が決まったらメールするね」

嬉しそうに席に戻っていく若菜を見て、こっちまで笑顔になった。

久しぶりの旅行だし、観光したり美味しいもの食べたりして嫌なことなんか忘れてしまおうと。

数日後、続々と集まってくる記念冊子の原稿をせっせと確認していたら、同僚から声をかけられる。

「水無さん、営業企画部の結城さんから内線です」

え？ 結城から……？

相手に驚きつつ、慌てて受話器を取った。

「お電話代わりました、水無です」

『お疲れさま。送ってくれた原稿見た。俺はOKだけど』

そういえば、先日もらった原稿の修正点を確認してもらってたんだっけ。早速見てくれたようだ。

さすが、営業企画部のホープは仕事が速い。

「ありがとうございます。じゃあこのまま進めます」

『よろしく。ああ、あと私的な内容で悪いけど、ちょっとお前に話があるんだ。午後の休憩時間に三階の自販機コーナーまで来てくれない？』

「……え、話？」

『ああ』

改まって話だなんて、一体なんだろう……？

「わ、分かった……」

『じゃ、後程』

それだけ伝えると結城からの内線は切れた。

——ええ……ど、どうしよう……ここへきてまさかのあの夜の話とか……？ 結城が相手だったりとか、ない、よね……？

受話器を持ったまま、茫然としてしまった。

そして休憩時間になり、言われた通り三階の自販機コーナーに行く。ちょっとビクビクしながら到着すると、そこにはコーヒーを買っている結城の姿が。ごくりと唾を呑み、緊張しつつ近づいていくと、すぐに気が付いた結城が軽く手を上げる。

「悪いな、休憩時間に呼び出したりして。あ、これ飲む？」

そう言っただけで差し出されたのは、買ったばかりのアイスコーヒー。紙コップの中を覗くと、私の好きなミルク入りだった。

「あれ？ これって結城の分じゃなかったの？」

「まあな。来てもらったお礼？」

さりげなくこういう気遣いができるのは、結城のいいところだよな。

ありがたくコーヒーを受け取り、自分のアイスコーヒーを買っている結城の言葉を待つ。

——彼は何を言おうとしているのだろう……？ そういえば呼び出されたのなんて初めてだよ。

私がモヤモヤしながらじっと彼を見ていたら、コーヒーを一口飲んだ結城が、「あのさ」と言っ
て私の方に向き直った。

「お前、湯浅に旅行誘われてるだろ？ 俺も、行こうと思ってるんだけど」

「えっ!？」

てっきり結城の話はあの夜のことに思っていたので、つい素で驚いてしまった。

そんな私のリアクションをどう受け取ったのか、結城が眉根を寄せる。

「なんだよ、俺と一緒に嫌なのかよ」

「いつ！ いえいえ！ そうじゃないけど、びつくりして。だっ、だっってほら、結城って最近同期の飲み会にもあんまり参加してなかったしさ……」

慌ててフォロワーする私に、視線を逸らした結城は「まあな」とコーヒーを一口飲んだ。

「最近どこにも出かけてないし、高原の綺麗な空気を吸いに行くのもいいかと思ってさ。で、お前は行くんだよね？」

結城にしては珍しく、やけに強く聞いてくるな。一体どうしたんだろう？

「う、うん、行くつもり」

結城の様子を窺いながら、私は小さく頷いた。

すると、飲み終えた紙コップをゴミ箱にポイッと捨てた結城が、再び口を開く。

「お前、行きは湯浅と一緒に行くのか？」

「ううん。一人で新幹線で行くつもり」

「……よければ俺の車で一緒に行かないか？ どうせ同じところ行くんだし」

結城が何故そんな提案をしてくるのか分からなくて、私は紙コップを持ったまま首を傾げる。

「でも運転大変じゃないの？ 新幹線ならのんびり行けると思うけど」

「最近忙しくて車乗ってなかったから、久しぶりに運転したくなったんだ。別荘の場所を教えてもらえば直接行けるし、新幹線より楽だろ」

そう言われたら、確かに新幹線より楽かもしれないと思ってしまう。

「乗せてってくれるなら、ありがたいかな……」

結城の話がああ夜のことでは無かったことに安心してしまった私は、楽という言葉に惹かれて、つい深く考えずに結城の提案を呑んでしまった。

「よし。じゃあ当日の待ち合わせとか、また連絡する」

「うん、よろしくお願いします」

素直に頭を下げた私に、結城は一瞬驚いたような顔をして、にこりと綺麗な顔を綻ばせた。本当に綺麗な顔しやがって。羨ましい。

そろそろ休み時間も終わりだったので、私は結城と別れ、自分の部署に戻った。

若菜に結城と一緒にいくことにしたと話すと、「よかったじゃん！」と笑顔で言われる。

結城に別荘の住所を教えると言う若菜にお礼を言っ、私は自分の席に戻った。

こうして連休は、私と結城、若菜と彼氏の真太郎君の四人で旅行に行くことが決まった。

何着て行くのかな……と考えたところで、ハッとすする。

車って、思いっきり密室じゃん……!!

結城がああ夜の相手とは限らない。けど、だからと言って密室で二人きりって気まずくない？

なんで、わざわざ自分から、よりハードな空間を選んでしまったんだ、私……!?

一見楽な方に乗って、その実自ら苦行に飛び込んでしまったことに気付き、ただ茫然とするしかなかった。